



哲學研究

第百三十號

第十二卷
第一冊

デイルタイの心理學的理念の基本
的なるものについて (完)

十二

檜崎 淺太郎

個人を眞に完全に體認せんがためには、その個人の發達し來りたる過程を経験しなくてはならない。デイルタイは斯くの如くに考へて、精神生活の發達を、記述的分析的心理學の一對象となし、精神の發達に關する氏の見解を叙述して居る(七二—一三二—三六頁)。私はこれから、デイルタイの精神生活の發達に關する諸見解の重要なものを略述する。

デイルタイに依れば、精神生活の發達は(1)身體の發達(2)物理的環境の影響及び(3)

其の周圍の精神界の影響の、この三種の外的條件に依つて規定せられてゐるが〔七〕二三五頁然しこは發達の現出する條件であつて、發達の原動力そのものではない。發達には發達の條件の外に、發達それ自身を成立せしむるものを要する。デイルタイは之を氏の所謂根源的精神組織 (die ursprüngliche Struktur) に求めてゐる〔七〕三二頁。この根源的精神組織は、夫自身が一つの合目的々發展體であつて、こは常に衝動意志、感情内に現出する所のものである〔十〕九五頁。精神生活の發達の唯一の基礎は、生けるこの組織に潜んで居る。この組織からのみ精神生活は漸次に發展成長する。この根源的精神組織の活動の核心を成すものは、極めて幼稚なるものより最高等なるものに至る諸種の衝動であつて、この諸種の衝動が一種の系統を形作つて、根源的精神組織の根幹を固め、この衝動が生命の前進を促し、従つて生命の前進力は、この衝動及び衝動の系統の活動に基づいて居る。而して一度衝動の開發せらるゝや、その結果として、感覺を生じ、感覺にはある種の感情が伴隨する。かくして衝動の發動に伴ひ、ある感情の伴隨生起するときは、この感情と衝動とが結合して、衝動の活動を時に促進し、時に抑壓する所の一種の意志系統を築く。而して衝動の發動は常にある客觀的なものに、直接又は間接に相關係するが故に、この衝動と感情との結合の外に、更に之

に觀念の添加し來つて、茲に衝動系統、感情系統、意志系統、觀念系統の聯合が生ずる。之等の諸系統の第二次的聯合の結果は、衝動より來る發達力の外に、第二次的の發達力を誘出し、兩者相寄り相助けて精神の發達の原動力となる。この第二次的發達力の加わるや、衝動活動の外に、意志活動の開發せらるゝに至り、環境に對する適應生活 (das Eigenleben an seine Umgebung) が一層有效に行はるゝに至るものである(十)九六頁)。

この環境に對する適應生活は、精神組織の基本標式(der Grundtypus)であつて、こは既に攝食衝動の發達過程にすら、明に之を認むることが出来る。即ち攝食衝動に基づき食物を食するとき、一種の味覺と満足の感情とを生じ、この味覺と感情とは、攝食衝動に結合して、その以後はある食物を求め、他の食物を避けんとするの有意的運動を營むに至るものである。精神生活は、實にこの適應生活を中心として發展する。

精神組織のこの基本標式は、一切の動物の生活に活躍し、既に之を單細胞動物のアミイバにすら認むることが出来、ヒドラに於ては一層明白に現れて居る。有脊椎動物にありては、高度に發達したる神經系統を有し、感覺神經と運動神經との中間に、神經系統の中樞部を形成せる大脳なるもの現出して、完全なる聯合の中樞を形成し、以て高度の發達に達したる精神組織の支持者となり、上に述べたる精神組織の基本標式

を完全なる條件の下に活動せしめて居る。而してかくの如き高等なる精神組織も、その始源に於ては單一なる基本組織より發展したものであるから、デイルタイは動物及び人間の世界の全系統は、この單一なる根源的精神組織の發展したものであると述べて居る〔七〕二二頁。

かくの如くにデイルタイは、精神生活の發展は、適應生活をその目標とするのであると考へるのであるから、生命統一體と外界との相互關係をば、最も抱括的なる表現として、之を順應 (Anpassung Zwischen der psychophysischen Iebenseinheit und der Umstanden, unter welchen sie lebt,) と名づけてゐる〔七〕二二頁。生命統一體が外界に順應せんがためには、先づ外界を感知せざるべからず。されば之に感覺系統が對應する。次ぎに感覺系統の感知したる外界に順應せんと欲せば、外的運動を營まざるべからず。運動系統は之に對應する。而してこの外界感知と外的運動とは、相呼應せざるべからざるが故に、兩系統の結合が成立する。最高の段階に到達したる人間生活と雖も、全有機體のこの大法則の外にあるものでもない。

精神組織が順應生活、換言せば合目的生活を營むに當つて、如何なる方向に如何なる性質のものを求むるかは、主として衝動と感情の示す所に従ふのであるが、しかし

衝動は大約の方向と大約の性質とを示すに過ぎない。その方向の微細なる決定は、主として感情に由るのである。例へば食し得べきものを求むるは、衝動に依るも、如何なる食物を選定するかは、主として感情に訴へる。さればデイルタイは價值は感情生活及び衝動生活中にのみ成立し (Wert entsteht nur im Gefühls und Triebleben,) (〔七〕二〇五頁) 價值は感情及び衝動生活中に於てのみ經驗せらる。 (dieser Wert aber wird nur im Gefühls und Triebleben erfahren,) (〔七〕二〇七頁。) と云つてゐる。吾人の知覺内容は、外界の不可知の性質の一記號系統 (ein Zeichensystem) であるが、感情も亦一種の記號系統と云ひ得る。而し感情の指示せるものは、知覺内容の如くに外界の性質にあらずして、自己の状態及び自己に影響を及ぼす諸條件についての、生命、價值の種類と程度とに關する記號である (〔七〕二〇八頁)。詳言すれば感情は自己の状態、又は自己に關する諸條件を、共に生命價值的方面より附號的に表示せるものである。この點より見れば、感情作用も亦一種の合目的活動である。

抑々も生命の過程と發達なるものゝ現出するのは、精神組織内に廣義の順應生活より見たる一種の合目的性の存在せるがためである。人間の發達は、シヨツペンハウエルの盲目的意志や、ヘルベルト學派又は唯物論者の所謂個々の精神力のアトミ

ステイクな遊戯から、起つて來るのでは無くして、衝動と感情とによりて、合目的發達の前進力が形成せられてゐるのである〔七二—四頁〕。衝動を満足せしめ、幸福の状態を誘致し、或はその状態を維持せんがために、精神生活の關聯は一種の努力を開發し、これが發達の前進力となる。

目的なるものは、精神組織内にのみ存在してゐる。目的は體驗せられ、內的經驗に與へられてゐるが故に、精神組織の合目的性は主觀的である。又精神組織の合目的性は、他の目的思想を必要とせざるが故に、この意味に於て內在的である。この主觀的內在的合目的性の概念には二つの作用を含蓄してゐる。其の一の作用は精神生活の成分の關聯は、常に變化しつゝある外的條件内に於て、生命の豊富、衝動の満足、幸福 (Lebensreichtum, Triebbefriedigung und Glück) を誘致せんとする傾向を有することである。この點に於て精神生活の合目的性中には、生命の状態の變化を豫想して居る。換言せば精神生活の合目的性は、この目的を貫徹せんがために、常に生命状態の變化を希望する。而してこの變化は分化と一層高等なる結合とに依つてのみ達せられるのである〔七二—五—二二六頁〕。

生命の豊富を致し、衝動を満足せしめ、幸福を誘致せんとするは、各吾人の精神生活

の直接なる内在的、主觀的、合目的性に基づくのであるが、この内在的、主觀的、合目的性は、個體及び種族の維持に關係ありと見るならば、精神生活の組織内に客觀的なるものを目標とせる目的性を内在的に許容しなくてはならない。これは超越的の目的理念であつて、合目的なる關係を説明するための一種の解釋である〔七〕二一六頁〕。

精神生活の發達の思想中に於て、最も重要な要素は生命價值 (die Werte des Lebens; Lebenswerte) である。生命關係は生命價值と密接に關係し、生命價值は感情の内にその姿を現はしてゐる。感情の内に於て體驗せられたものが、我々に對して價值を持ち、價値は感情と不離の關係にある。しかしそれだからと云つて、生命價值は感情の集合から成立して居るものではない。内的經驗の示す所に依れば、生命價值は感情から成立するのではない。寧ろ人々の經驗する所の生命の全き充實 (die ganze Fülle des Lebens) 人々の感ずる所の生命實在の豊富 (die Reichthum der Lebenswirklichkeit) 人々の内なる生命を完ふすること (Ansehen dessen) が、吾人の存在の價値として現れる。そして精神的組織關係は、生命價值を産出し、之を維持し、之を昇進せしめ、發展せしめんとする傾向を有して居る〔七〕二一六—二一七頁。

デイルタイは精神の發達に對して生命價值の重要なことを、上の如くに指摘し、

生命價値は感情の内にその姿を現はすも、感情その者にあらず、又感情より成立し居るものでなく、感情とは全然別種のものなりとなして居る。而してその生命價値の如何なるものなるかを追求して、生命の充實であるとして居る。然らば生命の充實とは如何なることであるか。この問題は氏の生命の理念に歸ることとなり、それは既に前に記述したところである。

精神生活の發展は、外的には外界への順應をその目標となし、內的には生命價値を生産し、維持し、昇進せしめんとするのであるが、之に達せんがためには多くの新なる要素の構成を必要とする。この要素の一は精神生活の關節 (Artikulation des Seelenlebens) の増加である〔七二七頁〕。茲に云ふデイルタイの精神生活の關節とは、各種の精神作用及び内容の分化と聯結とを意味するのである。即ち衝動の發動は感情を分化し、分化と共に両者は相結合して、茲に精神生活の新なる一關節が形成せられる。この衝動及び感情に依つて、印象が評價せられると、印象に感情が結合して、更に一つの新なる精神的關節を生じ、興味と注意が又印象に結合して、更に他の關節が増加する。又經驗は生命價値を正しく評價することを教へ、個性の深い所から、生命理想の統一が現出する。この生命の諸理想の系統も、又一種の精神的關節から成立してゐる。

この精神的關節は意志の領域にも現出する〔七二一七頁〕。

動物の身體の各肢體は受精したる卵から分化するが如くに、精神生活の分化と、分明と、その細密なる關係とは、生動せる精神組織から發達し、生ける精神關節は一切の發達の基底である (lebendiger Zusammenhang die Grundlage aller Entwicklung ist) が、この生動せる精神組織より、諸種の精神活動の分化し、發展し、結合することを、デイルタイは、精神生活の關節なる語を以て示さんとして居るのである。従つてこの精神生活の關節によつて、精神生活の獲得的(後天的)關聯が形成せられるのである〔七二一七頁〕。

發達は常に生命價值を實現せんとの傾向を有し、發達の各時期は、生命の特別の條件に對應して、個體を昇進せしめ、發展せしむる所以の生動せる感情の満足に資せんとするから、生命の各時期は各獨立の價值を有して居る。夫故に生命の各瞬間が、獨立の價值感情を以て満たさるゝならば、生命は眞に完全に近い。この獨立の價值感情が核心となつて、叙情詩が生れる〔七二一八頁〕。

かくの如き見解の下にデイルタイは發達小説、發達劇なるものを考察し、フアウストの發達劇は、人間の各時代の生命の獨立の價值を表現せんと努力したものであつ

たと解釋して居る。フアウストをかくの如くに解釋するの充分なりや否やについては、勿論多くの議論の存する所であらうが、兎に角、フアウストの一面は各時期に於て、各獨特の生命價值を追求して居り、こは生命活動それ自身の顯著なる一面である。發達は純粹なる生命狀態より成立し、生命の各狀態は各獨特の生命價值を獲得し、固定せんと努力する (die Entwicklung besteht aus lauter Lebenszuständen, deren jeder für sich einen eignen Lebenswerte zu gewinnen und festzuhalten strebt.) (七二二頁)。デイルタイが精神の發達を上如くに、生命の純粹なる狀態より成立すると云つて居るのは、深い内省的結果であらう。生命の眞の發展は、生命が純粹の狀態に達した所からのみ現出する。

かくの如くに生命の各時期は、それ〴〵獨特の價值を追求して居るのであるから、生命の前時期を後時期の手段と爲し、幼時に於てその發達期を後年の犠牲にするこゝとは、生命其の者から見ると洵にいたまじきことである。従つて又生命の成熟期に生命の目的を見出し、その以前の時期を、その目的のための手段となす程、誤つたことは他にない。生命の自然の性質は、生命の各瞬間を、寧ろその特有の價值にて充足せんとする傾向を有して居る(七二二頁)。

以上述べたる如くに、發達は生命の各時期の生命價值を實現せんとするの傾向が

あるが、之と同時に他方では又精神組織の合目的性から、發達と生命價值との他の關係が成立する。この關係に於ては、生命の各時期に實現せんとする生命價值就中單一なる衝動にある制限を與へ、之を規則的に満足せしむることによりて、その精力を減殺し、高等なる衝動の發動に、その場所を與へんとする。之がために、精神組織は種々に分化し、昂進し、高等なる組織を構成して以て、順應作用を増加し、之に依つて、より廣大なる、より豊富なる生命價值の實現を可能にしてゐる。實に人類に於ける精神生活の發達は、かくの如き状態の構成に基づいてゐる。之を以て生命の各時期に特有の生命價值を實現せんとする傾向と、高等なる衝動のために、單一なる衝動を限定せんとする傾向とは、一見相反するが如きも、實は然るにあらずして、後者は、生命價值實現の補充となるのである。(七二一九頁)。

生命の各時期は各特有の價值を保ちながら、その生命の發達中に於て精神生活の形態が一層複雑となり、一層高等なる組織となつて、生命が自ら發達し、この發達は老年期の極限にまで及ぶ。老年期に至ると、身體的精力漸次に衰へ、生命統一體と外界及び他人との生ける相互作用は次第に減少するに至るものである。さればカントもその老年期に於ては、他人の思想を少しも受容し能わざるに至つたと云はれて居

る。しかし有力なる理念群の發達、分化せる精神組織の形成及其の確定の大過程は、生活の最後まで連續する。この發達の大過程から、人間の生命發達の要素と時期とを一つの全體に結合する所の、大法則が生ずる。即ち人類に生起する所の發達は、生活の一般的並に特殊的條件に相一致して、順應生活に堪能なる、それ自身にて纏つたる一個の確乎たる關聯を形成せんとするの傾向がある。精神生活のあらゆる過程は、外的條件と相呼應して、吾人の裡にかくの如き確乎たる關聯を現出せしめんがために、協力的に相發動して居る。精神生活の均衡は種々の事情のため、時々破壊せられ易いが、合目的な關聯はこの破壊に對して、防禦の力と恢復の力を内に藏して居る。あらゆる人間的發達は、かくの如き意味、かくの如き力を有する後天的精神關聯を構成することに外ならない。精神のかくの如き姿體 (Solche Gestalt einer Seele) こそは、地上に於ける實に最高の實在であつて、嘗てナポレオンがゲーテを觀て „voll im Homme“ と云つたが、こは人間的なこの最高の存在を指示した語である。又この意味に於てゲーテは、人格を以て人類の最高の幸福となした(七、二一九—二二〇頁)。

後天的組織より成る精神のかくの如き姿態は、人格の内部に潜める形式 (innere Form der Persönlichkeit) である。この内的形式は、デイルタイが他の個所に於て「生ける秩序」と

も呼びたる所のものである。この姿態はそれ自身にて意義あり、それ自身にて完了せるものであるが、かゝる姿態を先驗哲學は、意識の統一の形式の下に、吾人の裡なる綜合力に基づいて形成せられたものであるとした。この内なる綜合力を、この種の哲學は更に根深く探究して、經驗的な精神群の外に存する綜合的なもの、自發的の構成力、統覺の先驗的綜合 (das Synthetische, spontan Gestaltende, die transzendente Synthesis der Apperzeption) とした。是等の綜合的なものは、先驗哲學によれば廣義の智的過程に屬するものであつて、人間性の他の方面とは全然獨立して、孤立的に存在し得るものとしたのであるが、デイルタイはこの見解を全然排斥して、かゝる姿態は組織關聯 (Strukturzusammenhang) から形成せらるゝものとしたのである。この組織關聯が生命の内的形式中に合目的性を與へる。精神の自然の發達中に現出する所の、この精神生活の一種の姿態は、之を詮じ詰むれば、内的合目的性を有する根源的組織の發展に外ならない。即ち根源的組織に於ては、印象によつて衝動が開發せられ、衝動を開發した印象の價値は、感情の内に體驗せられ、この印象の價値に導かれて、印象より構成せられたる外界への順應が可能となつて居る。かゝる過程中に於て、合目的と云はるゝものは、個體の活動が衝動及び感情の要求に適應せることを意味するのである。

而して直の完全なる合目的性は生命の成熟期に於て、個人の内完成せらるゝものである。最も好く統一せられた姿態が構成せられると、茲に初めて個人の内、合目的に作用する所の最大の力の發達を現出する。この統一は自己の維持及び生命感情に對して、著しい價值がある〔七三二頁〕。

精神的發達の基礎たるこの組織關聯は、個々の作用の結合せられて構成せられたものではない。寧ろ各種の作用は、この組織關聯から分枝したものである。我々はこの組織關聯の背後を見ることは出来ない (hinter ihm selbst aber nicht zurückgegangen werden kann.)〔七三三四頁〕。精神的過程の條件としての統一の本性 (die Natur der Einheit) は吾人の全然知る能はざる所である。この方向への探究は、吾人の認識の限界外にある。唯吾人の認知し得るは、精神的組織關聯内に、精神的發達の統一主觀 (ein einheitliches Subjekt der psychischen Entwicklung) の與へられて居ることである。而してこの精神的發達の衝迫的中心は、ディルタイに依れば、前にも述べたる如くに、各種の衝動である〔七三三四頁〕。

精神生活の發達は、上に述べたるが如き基本組織から發達するのであるが、この組織の内にて、その以前の狀態に存在しなかつたあるものを創造し、新なる價值を現出

する所の作用が潜んで居る〔七二二八頁〕。この作用が一種の創造的過程 (schöpferische Pro-nesse) を構成する。それであるから、今現に到達し居るある状態の次ぎに、如何なるものが直接に連續發展し來るか。こは豫言の外である。唯あるものが發展し來りたる後に、後よりその起因を漸く示し得るに過ぎない。吾人は動機から、行動を豫言し能はず、唯爲し得る所は、行動を見たる後に、分析的にその動機を後から確立し得るに止まる。吾人は將來起るであらう所のものを知らない。かくの如き特徴、こは精神的發達を身體的發達から識別せしむる消極的特徴であるが、かゝる特徴は歴史的發展中に明に認めることが出来る。偉大なる創造的時代に於ては、その前時代の特色より誘導し能はざる一種の昇進 (Steigerung) が常に現はれて來る。而してそは前時代に於て、豫言し能はざる所のものである〔七二二四頁〕。之を以て人間の發達史を觀ると、各時代には各特有の様式なるものがあつて、そはその前代にも亦後代にも見る能はざる所のものである。この特徴は一個人の發達中にも現はれ、兒童期、青年期、壯年期、老年期は各異なる精神的特徴を示して居る〔七二二五頁〕。

發達に依つて產出せられた成人の精神生活の後天的關聯の内には、各人に略ぼ同様の心像概念、價値の決定作用、確定せる意志の方向等が成立し〔七二二五頁〕。亦同一の

數系統、同一の空間關係、同一の文法的並びに論理的關係が構成せられてゐる。各人の後天的關聯に略ぼ同一の成素を含むのは、主として物的並に精神的環境の一樣に基づくので、この同一の環境と各人に略ぼ一樣の精神的組織關聯の存在せること、の關係から、後天的關聯内に於ける價值撰擇の一樣の形式、目的と手段の同一の關係、價值のある一樣の關係、生命理想のある一樣の特色も現出するのである。かくの如くに發達せる成人の後天的關聯には、類似の事實(Tatsachen von Verwandtschaft)があるが、この事實を、シュライエルマツヘル及びヘーゲルは、各個人に存する理性の同一性の形式(die Formeln von der Identität der Vernunft)と爲し、シヨツペンハウエルは意志の同一性の形式なりと、形而上學的、抽象的に表現してゐる〔七〕三二六頁。上述の如くに、各人の後天的關聯は同様の形式と同様の成素を含んで居ると共に、この後天的關聯は、ある範圍に於て常恒の諸關聯(Konstante Zusammenhänge)をその内に藏し、この常恒の關聯があらゆる個人の内と同様の形式に於て、幾度も反復現出する〔七〕三三五頁。心理學はこの後天的關聯の一樣性に屬する諸事實を蒐集して、心理學の構成の確實なる資料とするのである。しかして、この後天的關聯を更に深く探究すると、上に述べたる一樣性

の外に、一種の規則 (die Regel) をその内に含み、之によつて個性の發展が現出してゐるから(七二二六頁)。デイルタイの心理學は後天的關聯の一樣性の外に、獨自性、即ち個性の研究をも抱括し、兩者相待つて、初めて歴史的、社會的實在の一面を明らかに爲し得るものなりとしてゐる。

デイルタイの根源的精神組織、又は後天的組織内の核心を成せる生ける自發的發展體は、カントの先驗的統覺の第二の意義に於ける自覺としての根本的統覺と、その一部に於て相契合するところがあるかと思ふ。カントによればこの根本的意識の上に、諸種の認識が成立するのであるが、デイルタイによればこの根源的精神組織又は生ける自發的發展體の基礎の上に、一切の他の精神的活動が現出するのである。

カントの自覺としての先驗的統覺と、デイルタイの活ける精神組織の本質とを比較し、相補ふことによつて、精神的發達の根柢を固むることは、一つの興味ある將來の學的作業ではないであらうか。兩者は共に一種の存在である。しかもそれは單なる經驗的存在ではなくして、體驗内に存する根源的存在である。この點に於てカントの先驗的心理學は、デイルタイの組織心理學とある點に於て交渉を持ち得るかと思ふ。デイルタイによれば、人間の精神生活の發展は、上に述べたるが如くに、根源的精神

組織の本質的傾向に立脚し、身體の發達、物的環境、精神世界の三つの條件の下に、相互作用に依つて成立し、常恒なる一樣的並に獨立的後天的組織の構成を、その結果として有するに至るのであるから、人間の精神發達の科學的研究は、先づ精神發達の三大條件に沿うて進まねばならない。換言せば精神生活の發達の考察は、先づこの三つの條件の方向に視線を注がねばならないと氏は主張する。然しこれのみでは猶完きを得ない。精神生活の發展の本質的なるものは、發達の主體たる生命の核心の内にある。この核心は根源的精神組織より成立し、その中心點を形成せるものは生ける自發的發展體 (die lebend sich entwickelt) である。精神發達の研究は、この生ける自發的發展體を捉へて、その變化を、自發的發展體の内部に存する生命價值、合目的性等の諸要素と、外的諸條件との關係より規定し、就中特に自發的發展體の發達の各時期、兒童、青年、老年期に於ける特色を明示しなくてはならない。かく考へてデイルタイは精神生活の發達の研究の中心對象を、自發的發展體に見出して居る(七)二五頁(完)